

インタビュー

海外に、
「日本がナンバーワン」だと言わせることのできる、

繊維業界をリードする企業を目指したい

圓井繊維機械株式会社

圓井 仁志 Hitoshi Marui

#New textile material #Thread made from air



あらゆる繊維加工技術を駆使する圓井繊維機械株式会社のアトツギ、圓井仁志さん。社内で研究開発を行うだけでなく社外にも飛び出し、「始動 Next Innovator 2023」では最優秀賞にも選ばれました。もともとは教師として人生を送るつもりだったと語る圓井さんの、家業への想いをお届けします。

1. 教育に熱意があり、教師から家業へ

圓井繊維機械を継ぐという考えを持ち始めたのは、いつでしたか。

学生時代は教師になりたいという夢を持っていたので、大学で教員免許を取って、20代後半までは中学校や高校で教員として勤めていました。モチベーション高く仕事に取り組んでいたのですが、心と身体のバランスを崩してしまい、退職することになってしまいました。滋賀県の高校のラグビー部の監督も任され、張り切って働いていたのですが、泣く泣く帰ってきました。

大阪に帰ってきても、まだ家業を継ぐという意識は全くありませんでした。教育にしか興味がなかった自分が、十分に儲かっているわけではない技術畑の会社では、やっていけないだろうという考えが理由でした。大阪に帰ってからしばらくの間は、知り合いの会社で働かせていただいていた。今後どうしていくのか全くわかっていない、自分探しのような時期があったんですね。教師に戻ることも考えましたが、経営者に憧れがあったので、別の世界で何か一旗あげてからでも教師に戻ることはできるという考え方で過ごしていたんです。経営者になってみようということで、起業ではないですが、家業の一つの部門として建設関

係の事業をさせてもらいました。会社からお金を借りる形でスタートして、軌道に乗り始めたなと思ったのもつかの間、お金関係で騙されて大失敗に終わってしまいました。

どうしようかと思っていたら、見かねた社長（父）から「一人でやってもうまくいかな
いから、とりあえず一緒に頑張るか」と言われ、ぼーっと座っているだけの時期がありまし
た。業界のことは何もわからないし、どうしようか迷いましたが、借りた金ぐらいはなんと
か貢献して返していきたいという思いがスタートでしたね。

なぜ経営者への憧れがあったのですか。

教育関係に強烈な熱意があったからです。私は日本の教育を問題視していて、日本の教育や
社会に対して、何かを変革させていきたいという思いで教師時代も取り組んでいました。で
すが、一教師としてでは身の回りの3、40人にしか影響を与えることができない。教師の
世界は、あまり目立つと出る杭を打たれるようなレガシーな産業ということもあり、なかな
か自分がやりたいことをやりきれませんでした。「もう一度教師に戻っても、自分が求める
世界を作ることができない」という考えもあったし、また出る杭になって、打たれて精神を
病むのも嫌だし。

学校の中で出世して校長先生になる人生よりも、まだ時間のある今のうちに教師ではなく事
業家として声を上げた方が、社会をより早く動かせるのではないかと考えました。金持ちに
なりたいたけではありませんが、影響力を持てば、もう一度教育の世界に働きかけることが
できるのではないかと考えました。

その時に企業の社長が大学を買収したというニュース記事が目に入り、そこまでは夢のまた
夢ですが、自分もなにかできないかなと。例えば一地域の中小企業でも、その地で力を持っ
ておられる社長さんは、地域で教育に関するボランティア活動や授業をされているというこ
とを聞いていたんです。それができるようになりたいなと思って、事業家を目指すようにな
りました。

2. コミュニティに参加することで、マインドセットと意欲が高まった



家業に戻ってからは、何をしていましたか。

12ヶ月もの間、言われた通りの仕事をやって、ずっと会社に座っていました。そうしているうちに「このままではいけない。なにかやらないと。」と思うようになり、手当たり次第勉強しようと思ったんです。

ビジネス本を読んでもよく分からなかったものの、その意識でいると勝手に機会に出会えるようになりました。アトツギファーストに誘われて会員になったり、地域の経営者コミュニティに顔を出すうちに何百人もの知り合いが増えたり。色々な社長の方がいて、自分が憧れるような方を見つけるうちに、この人のようになりたいと勉強意欲がより湧いていきました。

半年ぐらいそうやって過ごしている中で、経済産業省が行っている「始動 Next Innovator」というイノベーター育成プログラムがあると聞いて、去年応募しました。スタートアップの

参加者も多いプログラムで、受かったので軽い気持ちで参加したんですが、思っていたよりも大きな転機になりましたね。

具体的にどんな転機となったのですか？

開発系の会社では、キャッシュフローが厳しかったりして、お金が回っていない中でいつ商売になるかわからない研究開発をしていたりします。それを問題視した中で、スタートアップの人たちの資金調達のやり方を知りたいと思い、このプログラムで勉強しようと参加しました。ちょうど研究開発をしていた事業の内容を提出したら、面白がられて通ったんですね。周りの参加者も、起業している方ばかりでキラキラしていました。そんなところから始まったんですが、仲間にも講師の先生にも恵まれて、そこで揉まれましたね。

最終プログラムとして、書類審査で通った人の中から授業での上位 30 名がシリコンバレーに派遣されることになっていました。

勉強をしていると負けたくない精神が出てきて、結果的に上位 30 名に入ることができました。アメリカに行くと、すごい世界に直面したんです。

選ばれて行っている方々は日本国内では既に活躍をされている方ばかりで、プログラムの中でお話しをするうちに自分のマインドセットもどんどん変わりました。アメリカに行った 30 人の中から上位 10 名が参加できる最終のプレゼン大会にも出場することができ、なんと優勝することができたんです。スタートアップや大企業の参加者が多いプログラムでしたので、参加者全員、町工場の息子が優勝するとは思っていなかったんじゃないでしょうか。

僕は体力なら負けていないということはわかりました。

「わからなければ教えてくれと言うしかない」という考えで、怖がらず人に聞きに行きましたし、可愛がっていただける方も増えたんです。何を聞いても教えていただけていろんな人脈が増え、それぞれからいろんなものを吸収させていただきました。

3. 繊維産業にイノベーションを起こせる企業に



社外の世界へ出て、人とのつながりを獲得した後に自社に戻った時と、入社した当時とを比べて会社の見え方は変わりましたか。

ここまでの2年間を走っていったのは、社長や家族、社員全員のおかげということを感じ、「ビジネスの成果に繋げて貢献したい」という気持ちが高まりました。それに、賞を取らせていただくと、かつて憧れた経営者の方々が憧れではなくなった感覚があります。シリコンバレーに行く前はよくわからなかったんですが、本に名前が出てきた人が自分の前に立つような実体験を経て、マインドセットが高まったと感じましたね。「なんとか彼らと同じ土俵に立って、事業家を目指した当初に思い描いていた夢を掴みに行きたい」という思いが生まれました。

会社への貢献が一番最初になくはないものだと思うんですが、帰ってきてから繊維の事業を色々やっていると、これからこの業界はどうなっていくんだろうということを考えるようになりましたね。営業の仕事をする中で繊維産業の知り合いも増えてくると、俯瞰的に見てかなりレガシーだし成熟している産業なので、素晴らしい技術を持っている方が日本国

内にたくさんおられて。今でも熱い眼差しで頑張っておられるんですが、日本の産業を支えてきた業界なのに業界全体が儲かっていないことを、コンプレックスにとらえている部分もありました。

やはり何かイノベーションを起こしていかないといけない。だけど、会社を守ることにフォーカスしてきた中小、老舗の会社がいっぱいいる業界で、なかなか新しいことにチャレンジできていない現状もありました。圓井繊維機械は新しいことをどんどんやってきた会社なので、繊維業界で面白い取り組みをしている会社として代表例になって、日本の繊維業界をリードしていけるような役目も果たしたいと考えています。大学教授やスタートアップの人が相談に来るような会社になりつつあるので、新しい製品を開発したい人たちに弊社が昔から築いてきた技術を提供して、彼らとタッグを組みながら新しい商品をグローバルに展開していける会社になればと思っているんです。

繊維を勉強していくと、アパレル以外でも産業資材など、多くの場所に使える商材だということに気が付きます。自分たちもまだまだ勉強しながらでないと追いつかないほどの技術や素材の種類が様々あり、それだけ繊維には可能性があると思うので、もっと儲かる業界になってほしいという願いはありますね。日本国内ではこの分野が急激に衰退していますが、一方で、新しい技術、例えば新素材開発や金属を編んだりチューブ状に加工するといった新しい技術開発に取り組む企業は多くありません。全てが大きな利益を生むものではありませんが、弊社には他では真似できない独自の強みがあります。衰退する業界だからこそ、新しいことに挑戦し続けることで、ポジションを確立できるのではないかなと思います。

これからに向けて何か考えていることはありますか。

細長いものを全部繊維と呼んでいますので、細長いものをどうにかしたい方がいらっしゃったら、ご一報いただければ一緒に試作します。

グローバルに展開できるようになって、もう一度「やっぱり日本の繊維の技術はすごいね」と海外に言わせてみたい部分もありますし、日本国内で優れた技術が埋もれているところも見てきました。もう一度グローバルに認められるような国、日本がナンバーワンと言わせることができるような商材を生み出したいと思います。